

「親心を育む／一日保育者体験」レジュメ 松居 和

(ブログ;「シャクティ日記」<http://diary.luci.jp/> にも最近の状況を色々書いています。ぜひ、参考にしてください。)

幼児が生まれてはじめて歩いたとき、それを見た人間は嬉しくなる。そして、一緒に見ていた人間たちの心がひとつになる。それが人間社会の原点だと思います。その風景が、人間たちに生きる力を与えた。幼児たちに信頼されることで、人間性の土台が出来上がっていった。

家族の絆が薄れ、家庭という形が崩れ、人々の心が先進国社会で荒れ始めています。日本という国で、いま保育者たちが、幼児たちと人間たちを出会わせる努力をしてくれれば、と願います。そうすれば、この国はまだだいじょうぶ。

もし、このまま子育ての社会化によって家庭崩壊が進み、競争の中で人間たちが孤立し、弱者がその存在意義を失い、それによって社会がますます荒れはじめたら、義務教育が成り立たなくなってくる。保育界は待った無しの状況に追い込まれていると思います。

長い間、産むことは、即ち育てることでした。ほとんどの人間が、0歳児との、言葉の返ってこない会話を日々繰り返して、乳飲み子を見つめ、一緒に眺め、その気持ちを考え想像する体験を積み重ねた。そうして、人間たちは幸せになる方法、道を実際に発見してきました。

0歳児との不思議なコミュニケーションがすべての会話の最初にあって、それをほとんどの人間が体験することで、何千年もの間、人間は精神的健康を保ち、生きるために必要な絆を育んできたのです。

子はかすがい、ではなく「子育て」が人類のかすがいだった。

いま、全国で、0、1歳児を毎日11時間も保育園に預けることを躊躇しない親が増えていきます。講演先で会う役場の人たちが、心配そうにそう言うのです。「子育て」が進化の絶対条件だった人類にとって危ない「意識改革」が進んでいるということ。それにいま気づかなければ、社会という仕組み自体が成り立たなくなってくる。

保育という仕組みについて言えば、すでに人材も、財源も不足し限界が近づいている。ひょっとするともう限界を超えてしまっているのかもしれない。

いま、少しずつでも親に子育てを返していかないと、学校教育や福祉を含め、社会を支える仕組み全体が共倒れになっていきます。

「子育てしやすい環境づくり」は「保育施設を増やし、乳幼児を母親から引き離すこと」と言う学者や政治家たちがいる。それでは、「子育て放棄しやすい環境づくり」でしょう、と心ある園長たちは思うのです。これでは、幼児の最善の利益を優先するという保育指針に反している。なによりも、幼児たちの気持ち、幼児からの視線が欠けている。

主張できない幼児の、親と居たいという願いを想像しなくなったら、社会から人間性がどんどん失われてゆく。

いい保育者は子どもたちの幸せを願います。ただ保育施設を増やせばいい、保育時間を増やせばいい、というやり方で、子どもたちが幸せになるとは思えない。だからいま、いい保育者たちが保育現場から去ってゆく。(保育園の保育士不足は深刻です。0歳児を預けようとする親に対応し、3、4、5歳を担当していた加配保育者を0歳に回したら、3、4、5歳の部屋が混沌とし、数年後、学校教育がますます追い詰められる。)

(子ども・子育て支援新制度が始まる時に、その時点で待機児童が二万人しかいないにもかかわらず、あと40万人幼児を保育所で預かります、と首相が国会で言った。政府は、国民を人間として見る前に「労働力」として見ている。だから、労働しない幼児の姿や気持ちが見えて

こない。幼児という、国の未来を担う人たちの「気持ち」が経済競争に巻き込まれ、後回しになっている。)

日本はまだ奇跡的に良い状況にあります。アメリカで3割、フランスで5割、スウェーデンでは6割の子どもが未婚の母から生まれ、子育ての社会化が進み家族という形が失われ始めています。子育てが人々の人生の目的から外れてくると、社会全体のモラル・秩序が崩壊していく。犯罪率（たとえば傷害事件）を比べれば、アメリカは日本の2.5倍、フィンランドは1.8倍、フランスは6倍です。

日本がなぜこれほど良いのか、と私は考えます。子育てによって培われる「弱者に優しい心」が、まだ社会に残っているからだと思います。乳幼児たちと真面目に付き合ってきたからだだと思います。男女が協力し子どもを育てる姿勢が、欧米に比べ奇跡的に残っているのです。真の意味での男女共同参画がまだこの国には残っている。(だからこそ経済状況もヨーロッパに比べれば奇跡的にいい。親が子どものために、子どもが親のために頑張ってきたから、国としても、経済的にも良かったと考えるべきで、このまま経済論と雇用労働施策で家庭崩壊をうながしては本末転倒になってしまう。)

### マザー・テレサの言葉

この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、「自分は誰からも必要とされていない」と感じる事なのです。~マザー・テレサ~

「死にゆく者たちの家」を作り、そこで弱者のために活動し、人生の最後、誤魔化せない瞬間に立ち会い続けたマザー・テレサの言葉を読んで、あらためて思います。ほとんどの人間が人生の一時期、幼児を慈しみ育て、彼らが全身全霊で信じ頼ってくれることに感謝すれば、「自分が本当に必要とされている瞬間」を数年間実感し、その記憶が人生を支えてくれるはずで

### 未満児保育の大切さ

繰り返し言われてきたことですが、3歳までの子どもの育ちは、人生において決定的な要素を持っています。大切なのです。

人間が生まれて三年間の脳の発達を考えれば、その時期の話しかけや抱っこ、接し方、声の調子や叱り方、刺激や関わりがその子の将来の思考や行動パターンに様々な影響を及ぼすことはすでに証明されていて、だからこそ、国連の子どもの権利条約やユネスコの子ども白書にも特定の人間（主に家族）と乳幼児が過ごす権利や、その大切さが謳われているわけです。それすら保障されない状況に、この国が、政府の経済施策によって追い込まれているのです。

保育士に都合のいい幼児にするために、子どもが生き活きとすると事故が起きる確率が高くなる、と0、1歳児に話しかけない保育さえ現れています。保育士の質が落ちてきて、採用時倍率も出ない状況では、そんなことを言う園長がいても不思議ではない。この時期に話しかけてもらえないと、壁に向かってじーっとしている幼児が数ヶ月で出来上がります。これはもう保育という名の虐待です。それを親たちが知らない。

政府に11時間保育を標準と言われ、乳幼児を3人、4人、次々に抱っこしていたら保育士の腰が持たない、労災の問題です、という園長もいます。そこまで言われると、そうですね、所詮仕組み自体がもう無理なのです、これ以上0、1、2歳児を今の仕組みで預かること自体が間違っているのです、と答えるしかありません。

### 保育園・幼稚園における「一日保育者体験」について

私はこういう講演を始め30年になりますが、すでにそのころから園長先生たちは言っていました。保育園で預かれば預かるほど、親たちから親らしさが消えてゆく、と。

それでは、保育園で親心を育てるにはどうしたらいいのか。

10年前、保育園の園長先生たちと「親心を育む会」という勉強会を始めました。

そこで提案されたのが「一日保育者体験」。年に一日、保育園の場合は八時間、親が一人ずつ、園児に囲まれ過ごす。

三つの園でやってみました。その結果は、会のメンバーを驚かせました。普段から親たちとの信頼関係が育っていたのでしょうか。親が全員参加しました。文句がほとんど出なかったのです。感想文に、判で押したように、保育園への感謝の気持ちが書かれていました。（「親心を育む会」のホームページに感想文が千以上積み上げられています。園長先生たちが作った「保育士体験」のマニュアルもダウンロードできます。）

始めは、半数の親が嫌がります。会社を休んで8時間（幼稚園なら5時間）。しかも一日ひとり、または一部屋にひとり。でも、半数の親たちが、何月何日私が来ます、とスケジュール表に書き込んでくれました。つられて残りの3割が書き込みます。最後の2割は、もう他の親たちの保育者体験が始まっていますから、子どもたちが「お母さんは、いつ来るの、お父さん、来るの？」と聞いてくれます。

保育者は、「子どもたちが喜ぶますよ」「子どもたちが喜ぶますよ」と、繰り返し薦めます。園は親子の幸せを願って取り組んでいるのです。園に対する信頼があれば、一年かければほぼ全員参加します。説得できないなら、まだ信頼関係がないのだ、と思い、親たちと心をつなげる努力をする。そして、子どもたちを可愛がり、「子どもが喜ぶますよ」を、心を込めて言い続ける。

それでも駄目なら仕方ない。そういう親はたぶん室町時代にもいたでしょう。気にすることはありません。人類の進化に必要なのでしょう。

一日保育者体験は、父親母親ほぼ全員が参加した時、園と親たちの信頼関係ができた、という事なのですが、一組でも参加し、その一家の人生が変わるなら、それだけでも実は素晴らしいことです。全員は無理でも、全員を目指す。その決意に意味がある。

お母さんがやったら、お父さんも、お父さんがやったら、お母さんも。夫婦が、別々の日に、卒園までに3回か4回、これで一家の人生が変わります。参加した親の感想文を園だよりに掲載したり、玄関のところに写真を張り出したり、参加人数が少なかったら、参加した人、やって良かったと思った親に、祖父母もいかがですか、もう一度どうですか、と薦めます。幼児と居て楽しそうな人を一人ずつ増やしていけば良いのです。（特に父親。もともと男子は大人になっても子どもです。素直になると幼児と波長が合います。）

埼玉県では、三年以内にすべての幼稚園保育園で、を目指すことになりました。当時の厚生労働副大臣に頼んで、新しい保育指針の解説DVDに、保育参加の例として「保育士体験」を入れてもらいました。保育参観ではなく、参加を、これは、保育指針に書かれ、法律として決まった保育園の役割です。そのことは、堂々と親に言っているのです。法的裏付けもあるのです。でも、やはり親を説得する言葉は、「子どもがよろこびますよ」が一番良いのです。

#### ☆保護者アンケートより抜粋

- ・紙芝居を子どもに家で読んであげると、たくさんの子どもの前で読むのでは、今日のほうが緊張しました。一日保育参加にきてとてもよかったです。
- ・本人に生活習慣を学ばせるのは、すごく難しく、保育者の先生の手法がとても勉強になりました。お洋服のお着替えも、あのくらいできるんだと感動しました。それにしても先生はすごい！ と、息子のときもそうでしたが、改めて感じ、感謝いたしました。
- ・とにかくエネルギーにあふれていて、パワーに圧倒されてしまいました。先生は本当に大変ですね。すごい!! と改めて感謝しました。保育参加できてとてもよかったです。読み聞かせは、もっと子どもたちの表情を見ながらやればよかったです。

・保育者の先生方の日々のご苦勞を実感しました。わが子のしつけだけでも毎日疲勞してしまうのに、多くの子どもに囲まれつつも、教育と安全と、調和を考慮しながらの保育の姿に頭が下がる思いと、紙芝居を読むことが、会社で上司や同僚の前で行うプレゼンより緊張するのだなと驚きました。

・最初は皆と仲良くできるか不安でしたが、子どもが好きなので皆に『○○くんのママ～』って逆にかまってもらって嬉しかったです。

・平日は朝早くから夕方遅くまでお願いしており、忙しくしているので先生方の顔すらよく分からなかったのですが、今回の一日体験で園の中の様子や先生方もよく知ることができました。

・保育園での生活リズム・お友だちの顔・お散歩コース等々、いままで知らなかったことをたくさん知れて、いい勉強になりました。保育体験をするまでは不安でいっぱいでしたが、子どもたちが楽しく接してくれ、楽しい一日を過ごせました。でもやっぱり先生方の仕事は大変だなあと改めて思いました。感謝、感謝です……。参加してよかったです。ありがとうございました。

(一日保育者体験は、幼児に囲まれ、親が自分の中にある「よい人間性」に気づく日、自分の持って生まれた本質を体験する一日です。そして、親の感謝が保育者を育て、学校教育を支える。親の感謝が希薄になると、いい保育者から、いい教師から辞めていきます。)

「一日保育者体験」は、保育者にとってもハードルです。いつでも親に見せられる保育をする、という意味表示。残念ながら、これに躊躇する園があつて、このまま進み、保育がただの仕事・労働、サービス産業になってしまったら、そんな園が増えてしまうかもしれません。老人介護も含めて、福祉の怖い所は、それがただの「仕事」になった時に、現場から真心を持った人たちが去ってゆくことです。

だからこそ、子どもたちを守るために、いま「子育てを中心にした絆の復活」を進めなければならない。

(保育の質の低下は、保育者たちだけの責任ではありません。公立の保育士の6割が非正規雇用で、無資格の保育者を入れなければ11時間開所が成り立ちにくい状況を作っているのは政府です。新制度で11時間保育を「標準」と名付けた時点で、政治家はその馬脚を現しました。子どものための制度ではない。税収を増やすための雇用労働施策でしかない。小規模保育は半数が無資格でいい。「保育は成長産業」などという掛け声に合わせて、新たな保育の形体に利潤を追求する人たちが参入して来ています。子どもの幸せを考えない無理な規制緩和で、日本の保育から心が奪われようとしています。

そうした状況に、大学や専門学校における保育科の定員割れが拍車をかけます。明らかに現場に出してはいけない学生に資格を与えるようになった時、保育者養成校はその存在理由を忘れてしまった。非正規雇用、無資格の保育者の質が必ずしも悪いわけではありませんが、政府や行政が保育(幼児の子育て)を軽視し続けると、国全体の子育ての質が低下し、学校が苦しくなり、障害者や老人を対象にした福祉も連鎖して、福祉全体がやがて限界にくる、ということなのです。)

「一日保育者体験」で、子どもが嫌い、という親が変わり、父親の幼児虐待やDVが止まったりします。子どもたちの「お父さんが来てくれた」という素直な喜びと信頼が、男たちの「生きる力」になります。

一回やったらもういいじゃないか、という父親がいます。しかし、3年続けると、我が子の成長だけでなく、他の子たちの成長も見えてきます。自分が園に行っただけで喜んでくれる。生きていてだけで、喜んでくれる。我が子だけでなく、他の子も喜んでくれる。そんな体験が、父親の心に、自分は他の子どもたちにも責任があるのではないか、という気持ちを芽生えさせる。部族の感覚です。先進国社会が失いつつあるコミュニティーの原点です。

友だちのお父さんお母さんに毎年一度出会い、世話してもらったり、読み聴かせをしてもらったり、遊んでもらうことによって、子どもたちの心に「みんなにお父さん、お母さんがいる」という意識が生まれます。子どもたちが、自分の親の他にも親身になってくれる人が存在することを小さいうちに肌で感じる。それはお友達のお父さんかも知れない、お母さんかも知れない。これもまた生きる力。部族の感覚。これで小学校でのいじめがずいぶん減るでしょう。

頼ることができる人、信ずることができる人が世の中にはいる、と知ることでは人は安心します。頼ろうとしなければ、絆は生まれません。信じようとしなければ、信頼関係も生まれません。子どもたちが大人を信じようとする、そして大人たちがそれに応えようとするのが人間社会の原点です。

本気でいじめを無くそうとするなら、親同士の絆を作り、親と教師が信頼関係を作ろうとする姿を子どもたちに見せることです。大人たちが子育てで心一つにしようとしなければ、教育や力で抑制しようとしても、本当の解決にはなりません。

社会が人間性を保つためには、預けたいという親のニーズに応えるのではなく、子どもと一緒にいたい、親と一緒にいたいという人間の本能に応えることが優先されるべきなのです。子どもたちの幸せを願う保育者たちは、現場の体験から、子どもたちの幸せは親子関係にある、と知っています。自分たちが預かれれば預かるほど、親たちが親らしさを失ってゆくのではないか、というジレンマの中で生きています。それに気づかない人たちが、保育施策を作ってきた。

ここ20年ほど進んで来た雇用労働施策中心の保育行政とそれに伴うシステムの考え方には、子どもと最も接する時間の長い保育士の幸福感（観）という関数が入っていない。それゆえ、いずれシステムとしても成り立たなくなる。

品川区でも、8年前から全ての公立保育園幼稚園で「保育者体験」が始まっています。板橋区でも去年から始まりました。板橋区のホームページには、各園ごとに保育士体験の写真、親の感想文、保育士の感想文が載っています。長野県の茅野市では、市長が「一日保育者体験」をマニフェストに入れて当選し、父母から祖父母の一日保育士体験まで進んでいます。千葉県の市原市、石川県の小松市、横浜市、所沢市でも市長さん区長さんがやりましょう、と言ってくれました。高知県と福井県では県の教育委員会が主体になり県全体で始まりました。この方法で社会に感性を取り戻せば、人間社会に、自然治癒力、自浄作用が戻ってくるのです。

### 「赤ん坊が人々の絆を育てる」

中学校で家庭科の時間に赤ちゃんに触れあう体験を生徒にさせている学校があります。妊婦さんや乳児のボランティアを保健所で募って中学校に行ってもらいます。私が見学したのは母校の富士見ヶ丘中学校でした。妊婦さんが一人と、乳児を連れてお母さんが10人。教室の前の方に並びます。赤ちゃんたちはあっちを見たり、お母さんを見たり、眠っている子もいます。一人ひとり、赤ちゃんを膝に置いてお産の時の体験談を語ります。大変だったけど感動しました。そう語るお母さんの顔には真実があります。未熟児で本当に心配したんです、危なかったんです。そう話すお母さんの真剣な顔に、母の強さと優しさを感じます。人間の弱ささえ感じます。それを中学生が見ています。

グループになっている中学生の机のところに赤ん坊がきます。お母さんが「抱いてみて」と言います。一人の中学生が、恐る恐る、でも嬉しそうに赤ん坊を抱きます。その光景に私が嬉しくなります。お母さんは中学生を信頼して大事な赤ちゃんを手渡した。次世代を信じたのです。信じてもらった中学生が、誇らしげにクラスの友だちを見ます。いつか自分も次世代を信じる時が来るのです。

赤ん坊を抱くのが上手な男の子がいました。シャツがズボンのそとへはみ出して、不良っぽく見せています。その子には小さな妹がいて、いつも抱いていたのです。みんなが驚いて感心します。彼は、家ではいいお兄ちゃんだったのです。昔の村だったらとっくに知っていたことなのに、いまは、家庭科の授業がなければ知ることのできない友だちの姿です。

僕も昔はこうだったんだ、と誰かが思います。お母さんたちも、中学生を見て、私も昔中学生だった、と思います。この時、魂の交流が時空を越え人類全体の人間性を形作るのです。選択肢がないことに気づくと、人間は安心するのです。

別々に歩いてきた道が、乳児によって結ばれる。生後3ヶ月の赤ん坊が存在する限り、人の心が一つになる次元が存在しているのです。

### 中学生の保育士体験

長野県茅野市で家庭科の授業で保育士体験に行く中学二年生に、幼児たちがあなたたちを育ててくれますよ、という授業をして、保育園に私も一緒について行きました。生徒たちは、図書館で選んだり自宅から持って来た絵本を一冊ずつ手にしています。昔、運動会の前日である坊主に祈ったように、絵本を選ぶ時から園児との出会いは始まっています。男子生徒女子生徒二人ずつ四人一組で4才児を二人ずつ受け持ちます。四対二、これが中々いい組み合わせです。幼児の倍の数世話する人がいる、つまり両親と子どものような関係です。もし中学生二人が一組だと、組み合わせや役割りに余裕がなくなるかもしれません。

四人いると一人が座って絵本の読み聞かせをし、二人が園児を一人ずつ膝に乗せ、もう一人の中学生は自分も耳を傾けたり、園児を眺めたりウロウロできます。園児に馴染んできたところで、牛乳パックと輪ゴムを利用してぴよんぴよんカエルをみんなで作って、最後に一緒に遊びます。

見ていて気づいたのですが、14歳の男子生徒は生き生きと子どもに還り、女子は生き生きと母の顔になる。お姉さんの顔になる。慈愛に満ちて新鮮に、キラキラ輝き始める。保育士にしたら最高の、幼児に好かれる人になる。

そして、考えました。

同級生四人なら、幼児を守って旅が出来る。人類の法則を学んだ気がしました。

帰り際、園児たちが「行かないでー！」と声を上げます。泣きそうな子も居ます。ほんの一時間の触れ合いで、世話してくれる人四人に幼児二人の本来の倍数の中で、普段は保育士一人対三十人で過ごしている園児たちが、離れたくない、と一生懸命叫ぶのです。私はそこに日本中で叫んでいる幼児たちの声を聴いたような気がしました。

中学生が幾人か涙ぐんで中々立ち去れない。それを同級生が囲んでいます。保育士さんと先生たちが感動しながら見えています。

### 「高校生の保育者体験」

高校生、中学生、小学生に夏休みを利用して三日間の保育者体験をさせている園長先生が島根県におられます。もう十五年も前からやっています。

ふだんはコンビニの前でしゃがんでタバコを吸っている茶髪の高校生が、園に来ると園児に人気が出る、というのです。不良高校生が保育園に来ると生き返るというのです。もともと、心が園児と近いのかもしれませんが。だからこそ一人でしゃがんでいたのかもしれませんが。

園児は駆け引きをしません。駆け引きをしない人たちに人気が出るということは、本物の人気です。高校生もそれを知っています。自分のままでいい、生きていだけで喜ばれる、という実感が「生きる力」になるのです。幼児を世話し、遊んでやって、遊んでもらって、弱いものに頼られる幸せが新鮮に思えるのでしょう。

幼児とのやりとりは、人間たちに、自分の本質は「善」である、ということを思い出させてくれるのです。本来の自分の姿に嬉しくなるのです。

家庭科の時間を使って、男女の高校生が二人ずつ幼稚園でクラスに入っているところを見ました。高校生たちが、幼児に混ざって一緒に遊ぶことで「いい人間」になっている自分に気づきます。女子生徒と男子生徒が、お互いを、チラチラと盗み見しています。男子生徒と女子生徒が、お互いに根っここのところではいい人間なんだ、ということに気づくのです。宇宙は、私たち人間に自信を持って0才児を与えている。人間すべてに幼児によって（または弱者によって、時には草花によって）ひき出されるいい人間性がある、と宇宙は信じている。私たちも、もう一度それを信じなければならぬ時期に来ています。

幼児と過ごすことによって男女間に生まれるいい人間性の確認、本当の少子化対策は、こういうところから始まるのだと思います。頼る幸せ、頼られる幸せ、両方を知っていなければ絆は育ちません。

### 校長先生の保育者体験

ある園長先生の園の卒園児が、いまはもう中学三年生なのですが、学校でとんでもない「ワル」になったというのです。行っている中学の校長先生が園長先生の友人で、お前のところの卒園児だが、本当に困り者だ、と話したのです。

一度見に行ってみよう、園長先生は、中学校に出かけて行きました。

そして、私に言うのです。

「見に行ったら、ちゃんとあの子がそこに居ました」

園長先生が見たのは幼稚園時代と同じ、あの子でした。幼稚園時代を知っている園長には、中学生になってワルと呼ばれても、その子の本質が見えました。

中学生は、幼稚園時代、自分が神様仏様だったころのしっぽをぶらさげています。園長先生の目はごまかせません。

その子の幼児期が見える、これが「親であること」です。保育園・幼稚園・学校と仕組みも変われば担任も変わるシステムに親の肩代わりは出来ない。子どもが50歳になっても、親が子どもを叱っている時、親たちは幼児期の子どもを見ていることがあります。それが、「親身」ということかもしれません。こういう時代だから、校長先生たちも親身になることを求められている。

子育て支援と言いますが、保育園が要求されているのは、子育て「代行」です。教育と言いますが、教師たちが求められているのも、かなりの部分子育て代行です。これをすると、ますます社会に親らしさ人間性がなくなっていくのですが、ここまで来てしまっただけでは相対性理論かエネルギー保存の法則かわかりませんが、誰かが補填していかないと先進国社会は成り立ちません。いまの政府の施策のように積極的にやられたらたまりませんが、望むと望まざるとにかかわらず「代行」するしかない。そして、お互いに育て育てられる関係だということにいつか気づくように、少しずつ意識的に、親に子育てを返してゆく。

校長先生たちにお願ひしました。中学生の中にその子の幼児期を見て下さい。それに話しかければいいのです。見えるようになるために保育園や幼稚園に行ってください。年に三日いくとずいぶんちがいます。園で見た子たちが中学生になる頃には、校長先生は引退しているかもしれません。それでもいい。感性の問題なのです。

講演が終わって懇親会の席で、校長先生たちが私の席に来て笑顔で言うのです。

「松居先生の話、孫が居るので良くわかります」そして、携帯電話の中に入れてあるお孫さんたちの写真を順番に見せてくれるのです。

「それがご本尊様ですね」と私も笑いました。

### 祖父母の一日保育者体験

子どもたちは、見守られるために存在します。茅野市の保育士たちが「祖父母の一日保育士体験をはじめましょう」と言いました。親がまだ半分しか参加しないのならば、祖父母でもい

い。見守られている、という意識が子どもたちに身につけば、きっと小学校でのいじめも減るでしょう。祖父母も喜ぶでしょう。子どもを使って、人間たちが喜ぶことをする、それが園や学校の役割です。（茅野の公立保育園では、すでに母親は100%、父親は80%参加まで来ている園があります。夫婦は別々の日に二人とも、を目指しています。茅野市のホームページに保育士たちの、やって良かったという感想文が載っています。）

## 「関わること」

「親心をはぐくむ会」で、保育とは関わること、という話になった時、関わるとはどういうことか、なでしこ保育園の門倉先生が説明しようとして、うまくできず、「とにかく子どもと関わること。関わることなんだよ」（門倉先生は女性です）と歯がゆそうに繰り返したのです。

すると、大島園長先生が言いました。

「1歳児、2歳児で噛みつく子があります。そういう時、私は、保育士を一人決めて、あなたは今日一日この子に関わりなさい、と言います。朝から夜まで10時間、その子につきっきりにさせるのです。他の子のことは考えなくていい、その子だけに集中させる。子どもが嫌がっても、させます。それを一週間、時には二週間。すると、その子が噛みつかなくなるのです」

「そうなんだよ。それが関わりなんだ！」びっくりするほど大きな声で言った門倉先生の目が燃えていました。

「四歳、五歳じゃ、遅いんだ。一歳、二歳でそれをやんなきゃもうだめなんだよ。昔はこんなことはなかったんだ」

1歳児は、保育士一人で（埼玉県は）4人の子どもを見ます。一人が「関わったら」負担がまわりに及びます。それでも、その時に関わらないといけない。その時の「関わり」がその子の一生に影響を及ぼす。その子の幸せを遠くまで見透す門倉先生と大島先生は、だから保育者に「関わらせる」。保育界に、もう少し余裕があったら、と思います。こうした日本の将来を見透す同志が生きているうちに、社会が保育の役割りの大きさに気づいてくれたら、と思います。

2008年新待機児童ゼロ作戦に「希望するすべての人が子どもを預けて働くことが出来る社会」を目指す、と書かれたとき、待機児童のほとんどである0、1、2歳児は、親と離れることを希望していないはず、「希望するすべての子どもが親と一緒にいることが出来る社会」を目指す方が自然ではないのか、と心を痛めた保育士がたくさんいました。親子が一緒に来ることが出来る子育て支援センターのような仕組みを充実させることの方が大切だ、と力を入れている園長たちもいます。一緒にいることは出来なくても、せめて年にたった一日、一人ずつ、親たちが「さあ、今日はあなたたちが優先です」という姿勢を自分の子どもだけではなく、ほかの子どもたちにも保育者にも見せてくれたら、それは人間社会に信頼関係を取り戻す意味で、大きな一歩になるはずで。

ある園長先生が教えてくれました。三歳までに親に関心を持たれなかった子どもは、安心の土台がない。新しい体験をしたときに不安がってそれが壁になる。安心している子どもたちは、新しい体験がチャレンジになって、壁がその子を育てる。

保育を30年やられて、いまは保育科で教えておられる中村榎子先生からいただいた手紙に書かれていた文章です。

「最近ある学生さんの書いた文章にとっても心を打たれました。...子どもの頃、両親が働いていて、自分は保育園に行っていた。迎えはいつもいちばん最後だった。そのことが悲しかったのではない。その気持ちをわかってくれる人がいれば、子どもは安心できるのだと。だから自分は、子どもの心がわかる保育士になりたい...と。とても胸を打たれました。と同時にこの人の強さにも、感動しました。」



この学生は、自分の悲しみを糧に、子どもたちの幸せを願う人に育ちました。

いま、こういう時代だからこそ「保育」の大切さを保育界や教育界が認識し、うったえなければなりません。週末48時間親に子どもを返すのが心配だ、と保育士が言う時代です。せっかく五日間良い保育をしても、月曜日にまた嘔みつくようになって戻ってくる、せっかくお尻がきれいになったのに、月曜日、真っ赤になって戻ってくる、家庭と保育園の役割が本末転倒になってきています。

母親が、妊娠中から保育園を探し始めるという行為が、人間にとって実はどれほど不自然か、社会全体が気づかない。これではいい保育士は辞めてゆく。

いま児童養護施設や乳児院は満杯で、ほとんどが親による虐待の犠牲者です。親子を引き離すために、保育所が仮児童養護施設の役割を果たさなければならなくなっています。待機児童に対処すればするほど、家族の絆が薄れてゆく。児童虐待やDVが増え、孤独な老人が増える。こんなことを続けていたら、この国もやがて欧米のようになってしまいます。この国は、欧米とは違う道を進み、人類の大切な選択肢にならなければいけないと私は思っています。

まず、親たちに「保育園はただ子どもを預かるところではない。親と保育士と一緒に子育てをすることで、行事には絶対に参加してください。園に協力してください。親がそれをしなければ、保育という仕組みは維持できません。限界にきているのです」とハッキリ言ってください。ほとんどの親たちが理解します。近頃の親は、保育園がいかに困難な状況に陥っているか、報道で知っています。ずいぶん言うことを聞くようになりました。いい機会だと思いません。

#### 「逝きし世の面影」(日本の伝統)

最近ベストセラーになっている「逝きし世の面影」渡辺京二著(平凡社)という本があります。その第十章に「子どもの楽園」という章があって、150年前に日本を訪れた欧米人が、様々な文献に書き残した日本の本当の姿が見えてきます。その章だけでも保育者には読んでもらいたい。子どもたちの美しさと日本の子育ての不思議さに驚き、欧米人がこの国をパラダイス、と呼ぶのです。「子育て」中心に生き、損得勘定を捨てている大人たちが、大らかにのびのびと幼児を眺めて暮らしていた国だった。

江戸という街では赤ん坊の泣き声が聴こえない、と書いてあります。

世界中で江戸ほど玩具屋の多い街はない。たかが玩具にこの国のひとたちはなぜこれほどにこるのだろう、と欧米人が目を見張ります。

江戸で朝、男たちが12人ほど並んで座っている。全員が幼い子どもを抱え、我が子の自慢話をしている。そんな男たちの絵まで残っています。

日本の子どもは5歳くらいまで誰かの背中で育つ。降りると、すぐに赤ん坊をおんぶする。

そして、日本人は幼児をしからない。ほとんど崇拝している。幼児は家庭の中で暴君のように崇められる。それなのに、なぜ6、7歳になると従順で優しい子に育つのだろう。日本の子育ては魔法だ、と書いてあるのです。

子どもを眺め、拝むことで自分たちの人間性が整うことを知っていた。人生は自分自身を体験することだから、いい人間性をひきだしてくれる子どもたちを中心に生きていた。

「子育て」で心がまとまっていた国だった。

#### 親心のビオトープ

埼玉のある町でのことです。中学校がひとつ、小学校が二つ、保育園が三つある町です。三つの保育園が以前から結束し、親の参加する行事をたくさん保育に取り入れていました。する

と、小学校が落ち着く。親たちがとても協力的で中学校でも問題がほとんど起きない。

学校も、生徒たちがいい親になって欲しいという意識を持って教育をする。

「教員の異動があると、この町で教えたいと希望が出るのです」と教育長さんが自慢げに話してくれました。中学校区という単位で、保育園が結束して親心を育てれば、知らず知らずのうちに学校も巻き込んで、親心のビオトープのようなものが出来あがる。

繰り返します。

0才児はしゃべれない、けれど、親と一緒にいたいと思っている、そう想像することが人間性だったはず。

人間は、幼児に信頼され、信頼される時間に感謝し、幼児にあこがれて生きてゆくのがいい。

技術や仕組みの進歩に惑わされると、急速な進歩が、何万年もの間育まれてきた人間の感性を退化させていることに気づかなくなります。もう一度、人は、信じあうために生まれてくる、ということを保育や教育の場で、親が幼児を眺めて思いだすといいのだと思います。

子どもを産み、育てるということは、人間が宇宙から与えられた最も尊い仕事であったはず。それは宇宙との対話であり、自分自身を体験することでした。生きている自分を実感し、人生の意味を理解する道でもありました。自らの価値を知ること、人間は納得するのです。

もっと尊い仕事は、子どもが親たちを育てること。それは宇宙の動きそのものであり、自分自身を体験すること。一人では生きられないことを宣言し、利他の道を示すこと。知ることは求めること、と気づいたひとたちを癒すために。

親が子どもを育てることは、人間の本能と意思がそれをさせている。

幼児が親を育てる風景は、宇宙の意思、姿がそこに現れる。

一日保育者体験に関する記事が「親心を育む会」のホームページから見る事が出来ます。

板橋区の一泊保育士体験（写真や感想文がたくさんあります。）

<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/categories/index04004012.html>

一日保育参加／埼玉県の取り組み

<http://www.pref.saitama.lg.jp/page/24moderu.html>

「保護者の保育参加事例集」

<http://www.pref.saitama.lg.jp/page/oyashien.html>

高知県教育委員会の取り組み

<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311601/hogosyanoitiniti.html>

茅野市の取り組み <http://www.city.chino.lg.jp/ctg/03091001/03091001.html>

保育士の感想（茅野市）

[http://www.city.chino.lg.jp/ctg/Files/1/03091001/attach/hk\\_taiken\\_9.pdf](http://www.city.chino.lg.jp/ctg/Files/1/03091001/attach/hk_taiken_9.pdf)

品川区の取り組み：

<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/menu000011100/hpg000011037.htm>

網走市の取り組み

<http://www.city.abashiri.hokkaido.jp/240kosodate/020itiran/010ninka/hoikushitaiken/>

さいたま市の取り組み：

<http://www.city.saitama.jp/www/contents/1318831876923/index.html>

映像で見る一日保育士体験 <http://www.youtube.com/watch?v=jvu4mKfzmJU>

AKB48『1日保育士体験で母性を磨け!』（注：こんな感じでも真理は見えるのかもしれない。）

<http://www.youtube.com/watch?v=2qKk49AETg4>

福井県教育委員会で始まっている一日保育体験。参加者の63.8%が「大変良かった」、「良かった」も合わせると97.3%という数字が県のホームページに載っています。感想文も沢山あります。幼保と家庭の信頼関係が、「一緒に育てる」という絆につながり、学校教育を支えてい

くはず。どんな形でもいい、大人たちが幼児たちの魂に囲まれる。それを繰り返してゆけば人間社会に自浄作用が働く。小学生くらいから始めて、十歳以上の人間と一緒に子どもを眺め、自分たちが失った物差しを確認しあえば、世代を超えた体験が重なり自然治癒力が働く。

待機児童を無くすのではなく、待機児童という言葉が消えてゆくのだと思います。

[http://www.pref.fukui.jp/doc/gimu/youjikyoku/youjikyokukatei\\_d/fil/023.pdf](http://www.pref.fukui.jp/doc/gimu/youjikyoku/youjikyokukatei_d/fil/023.pdf)

連絡先、講演依頼：松居 和 (chokoko@aol.com) <http://kazumatsui.com/> (ホームページ)

ブログ；「シャクティ日記」<http://diary.luci.jp/>

(ツイッター：@kazu\_matsui)

最新刊：「なぜ私たちは0歳児を授かるのか」(国書刊行会)

DVD：ドキュメンタリー映画「シスター・チャンドラとシャクティの踊り手たち」～インドで女性の人権問題で闘う修道女の話～(ロードプロモーション) ヒューストン国際映画祭金賞受賞

「衆議院、税と社会保障一体化特別委員会(6/12)での発言」

<http://www.youtube.com/watch?v=uiTxamfg6iM>

あとがき

視覚障害の子を引き受けた理事長先生から聴いた悲しいけれどなぜか美しい話です。保育の難しさ、子育てを共有しながら、部族社会(運命共同体)にはなり得ない、三年間だけの宿命を象徴する話です。

私立の幼稚園の理事長先生の体験談。男性ですが、子どもが大好きで熱血漢、県会議員もやっておられる年輩の方です。

ある年、視覚障害をもっている子どもを引き受けたそうです。経験がなかったので躊躇したのですが、どうしても、と言われ、決心し、自ら勉強会や講習会に通い、出来る限りの準備をしたのだそうです。

その子が入園して間もなくのころ、砂場でその子が一人で遊んでいて、自分の頭に砂をかけたそうです。その「感じ」がよかったのか、そっと、繰り返しかけたのだそうです。理事長先生は、注意することなしに「遊び」「体験」として見ていました。幾人かの子どもが集まってきて、その子にそっと砂をかけ始めました。それを理事長先生は、「育ちあい」として見ていました。長年保育をしてきた先生の経験からくる確かな判断がありました。その子のお母さんが見ていたことも、先生は知っていました。

無事に3年が過ぎ、卒園が近づいてきました。そして、その子の母親が「あの日」のことを卒園の文集に書いたのです。砂をかけられ幼稚園でいじめられている我が子の姿がどれほど不憫だったか。それを先生たちは笑って見ていた、と。

理事長先生は、あれほどびっくりしたことはなかった、悲しかったことはなかった、障がい児を預かるのはもうやめようかと思った、と話します。子どもに対する思い、保育にかける情熱に自信がありましたから、その気持ちが母親に伝わっていなかったことにびっくりしたのです。

3年間そういう思いで過ごしてきた母親の気持ちを思うと、私はやりきれない思いにかられます。しかし、これは、いい理事長先生といい母親のエピソードです。

その子は3年間、この二人に守られていたのです。

---

## 気づいた市長さん

成人式が来ると思い出します。ある市長さんが語ってくれたこと。

私の講演を聴いたあと市長室で向かい合い、市長さんが言いました。

「先日、市の成人式で挨拶したんです。会場はザワザワしていて、お世辞にも行儀がいいとはいえない若者たちで、真剣に聴いているようにも思えなかった。でも、出番が来て、幼稚園の園児たちがお祝いに舞台上で踊りながら、歌をうたったのです。幼児たちが舞台上に上がって並ぶと会場がシーンとなった。成人した若者たちが静まり返って、その歌と踊る姿を一心に見つめるのです。松居さんが講演で言っていたのはあのことですね」

こういう理解の仕方は嬉しい。

私はうなずきました。若者たちが、うらやましように園児を見つめる姿が目には浮かびます。それが宇宙の法則、遺伝子の働き、人間が真の幸せを探す姿です。園児たちの踊りと歌で、人間の心がまとまる。

若者たちはちゃんと、何を見つめるべきか知っている。幼児を眺めることは、自分自身の「働き」を感じることに。

-----

厚労省が出した保育所保育指針解説書というのがあって、その一番最後にこう書いてありました。

「保育所は人が『育ち』『育てる』という人類普遍の価値を共有し、継承し、広げることを通じて社会に貢献していく重要な場なのです。」

そうであってほしいと思いますし、そうでなければ人類が危ない、と思います。人類普遍の価値を人間に教えてくれるのが幼児たちだということに、再び、気づかなければいけません。

### 学問が子育てから心を奪っている

低賃金の労働力を確保するために（または、少子化で確実に減る労働力を維持するために）、十数年前に政府は保育士養成校を増やそうとしました。養成校で学び、資格を取れば、他人の「子育て」ができると勘違いした連中がいる。学問で、子育てができると考えた。そこがそもそも異常ですが、保育者養成校の存在自体がすでに構造的にかなり不自然で、子育てを任せるにはまだまだ不完全な仕組みだと気付いていなかった。実は、長年に渡って、保育士は現場で育てられていたのです。

政府は、「資格」という言葉で責任を誤魔化し、養成校が定員割れを起し倍率がでなくなることが保育界にとってどれほど致命的かということに、気づいていなかった。

定員割れを起し慌てた、ビジネス・生き残り優先の養成校は、政府の望み通り資格を乱発し、どんな学生でも受け入れ、0、1、2歳の保育には一番大切な、人間性のチェック機能さえ果たさなくなった。子育ての意味や大切さを教えるはずの教育機関が、「資格」の先にいる幼児たちの安全や安心さえ優先しなくなったのです。それまで何とか保育を支えてきた現場の心ある保育士たちは、幼児が優先されない状況に疲れ、国の「保育はサービス」という言葉を受け入れビジネス優先で考える園長の出現に呆れ、辞めていった。

最近、こんな報道がありました。

週刊朝日、2017.6. 2.発売号。

「てめえら！」響く保育士の怒鳴り声 “ブラック保育園”急増の背景”

<https://dot.asahi.com/wa/2017052400011.html>

「虐待あり、怒声あり、ネグレクト（放置）あり……。子どもが健やかに育つはずの保育園で、劣悪な運営実態がたびたび明らかになる。日本社会の縮図といえる保育崩壊の現場とは。

こういう状況は、一部ですが以前からあった。それが広がっている。

ここまで保育界が追い込まれ、子どもたちの日常が保育という仕組みでは守れなくなって、子どもが何年も怒鳴られ続け（一部ではありますが）、やっとマスコミが真面目に報道し始めた気がします。

「遅い！」と言いたい。でも、これからでもいい。真剣に取り上げ続けてほしい。

書籍では「保母の子ども虐待」という本がすでに20年前に出ていましたし、当時本の内容に関して報道されました。みんな実は気付いていた。週刊誌、新聞、テレビが、「主張できない幼児」の立場に立って、繰り返し、「こういう状況が止まるまで」徹底的に報道しなかったことが、政治家の安易な保育の規制緩和、市場原理の導入、現在の「子どもの立場に立たない保育施策」を生んできたのだと思います。

こんな状況になっているのに、「あと40万人保育の受け皿を用意します」と去年首相が国会で言い、それが今年は「50万人」になる。しかも、全ての野党が、こういう状況であるにもかかわらず、「待機児童をなくせ」と言い続けているのですから、与党がダメだと言っているのではありません。安倍さんだったら、もう少し、日本の未来は「子どもたちの育ち」にかかっているということを理解してくれるのではないかと、期待していたくらいです。（萩生田さんにも何度も説明しました。）

そしていま、悲しいほど問題なのは、こうして実態が報道され始めても、それでも躊躇せず0、1、2歳を預ける親が増え続けていること。

定年後、公立園の園長・主任が小規模保育や儲け型の認可園に園長として雇われるのですが、危ない保育を目の当たりにし、一年で去ってゆく。設置者に言っても、そんなことをやっていたら儲けが出ない、と言われ、親たちに「こんな所に預けちゃダメでしょ」と言いたいのですがそれも言えない。（それを言うのが園長ですし、告発義務もあるのです。）

ある園長は、ごく少数の「理解しそうな親にだけ告げました」と言うのです。しかし、この「理解しそうな親」たちが減っている。そこが一番怖い。

## 最近のこと

講演先で、保育士になった人の数を辞めた人の数が上回る市があります。現場で、次の世代を育てていたベテラン保育士たちがいなくなる。保育界の保育士不足は新制度が始まって1年で、一気に危機的な状況になっています。

三人目無料と言えば「タダだから」と預ける親が現れる。11時間保育を「標準」と名付けた時点で国の子ども・子育て会議は常軌を逸していると思います。政府がそう言えば、「そうなんだ」と思う親は必ず現れ、それが当たり前になってゆく。

最近、保育士たちが、昔「保母」と呼ばれていた時代を時々懐かしく思い出します。

その言葉に示されるように、保育は、主に母親の代わりにしようとする、そうした理解が社会にありました。

そのころは家庭もまあまあ整っていたし、親たちにも「親らしさ」があったから、自分で育てられないことへの後ろめたさがあって、その気持ちが、子どもを支えました。ですから保育者は、「代わり」はできなくても、そう努力してみること幼児と心を合わせようとする、まあまあ良かったのです。8時間勤務の保育士たちに、11時間保育を「標準」と言うことは、その努力を捨てなさい、ということ。「仕事」なのだから、割り切ってしましなさい。保母という言葉こそそろそろ完全に忘れなさい、「保育士」になりなさい、ということ。

その時点で子どもが体験する保育士は必ず一日二人になる。そして、親たちの気持ちが、「この人に預ける」から「この場所」に預けるに変わってゆく。

8時間勤務でなりたっている保育界に、11時間保育＝「標準」と言うことは、保育（子育て）は「人間対人間」ではなく、「人間対仕組み」だと宣言することなのです。この一線を越える危険性を、国の子ども・子育て会議に関わった人たち、学者や専門家たちは知らなかった

のか、気づいていなかったのか。加配相当の発達障害をもった子どもの親が、私も標準で、11時間でお願ひしますと言ったら、保育所はそれだけで責任ある対応ができなくなる。

保育士を三人募集して二人しか応募がなければ、現場に居るべきでない保育士を資格者というだけで雇わざるを得なくなる。複数の保育士が一部屋に居る三歳未満児の保育室は、保育に対する意識の温度差が致命的です。それに耐えられなくなって、心ある保育士が辞めてゆくことになるのです。

親たちのニーズではなく、保育士の数に合わせた予算組みが始まっている市もあります。

そんな中、「休みの日は、なるべく一緒にいてあげてください」と幼児の気持ちを慮って延長が親にすすめると、人権侵害だと、親が役場に駆け込む。プライバシーの問題だ、上から目線だ、とサービス慣れした親が気色ばむ。そういう親たちの顔を見ながら、一体自分たちは何をやっているんだろう、と保育士たちは思うのです。子どもを優先しない親たちの身勝手な言葉で、保育士の人生観が壊れてゆくのです。もともと保育士を目指す人たちのほとんどが、まず子どもたちのことを考える、という人間社会を支える貴重は「人生観」を持っている特別な人たちだった。この人たちがいまこの仕組みから消えていったら、保育は単に託児になり、その先に続く義務教育が成り立たなくなる。

国も学者も、なぜこれほど保育士が不足する事態になったのか、認識してほしい。国が子どもの気持ちを優先しないから、親もそうなる。保育士は子どもにとって最後の砦かも知れないのです。

心ある保育士の、「心ある」、これが保育そのものだった。

どんなに仕組みを変えても、保育の質は保育士の幸せであり、その幸せの「物差し」を現場で伝える園長や主任、ベテラン保育士の決意であって、その決意は、親のニーズではなく親子関係を眺めることから生まれていた。

保育は教育以上に子育てだった。子育てをする「思い」の共有だった。だからこそ園長や主任、ベテラン保育士の「優先順位を間違っている親は黙ってここを通さない」という決意が保育の根幹だったし、保育所保育指針にもそう書いてある。出来ていたかどうかは置いておいて、日本の保育に対する「思い入れ」「視点」は素晴らしいものだったはず。

各地で講演をしながら役場のひとたちに、国や親のいいなりになって保育の質を下げないでください。保育士が心のゆとりを失っていったら、取り返しつかないことになりますよ、と説明します。保育や学校教育を存続させたいのなら、心ある保育者を大切にすることです、とお願ひするのです。

### 子育てをする上で、保育の限界

ある、保育室での風景です。

保育士1人で複数の三歳未満児を担当。活発で手のかかる可愛い子が1人、大人しくて手のかからないいい子が1人いました。しばらく見ていると、保育士にとって手のかからない「いい子」が、一緒にいてもらいたい人を一日中探しているのがわかります。眠たい時に一緒に眠ってくれる人を探していました。しばらく観察していなければ見えてこなかったその子の一日が見えてきました。

それが毎日続くのだとしたら、人類にとって、あってはならない風景だと、ふと思います。

保育士も人間です。相性のいい子がいたり、特別に注意を払ってしまう子がいて当然です。慢性的に手が足りない状況の中で、保育士にとって「いい子」がふと見落とされてしまう。保育に平等は不可能です。人間社会に平等が不可能であるように。

本来無理な仕組みの中で、頭で考え過ぎ「平等」という形だけの言葉に縛られることで保育

士が感性や人間性を失ってしまったら本末転倒です。保育が「子育て」である限り、複数の幼児を担当すれば、毎日、日常的に限界はあるということ。それを見極めることが保育に一番大切なことかもしれない。

親子という一生の関係であれば充分修復可能、許される不公平な一日が、保育では許されない。そういう矛盾を抱えた仕組みだからこそ、なるべく親子の關係に目を光らせ、その重要性を認識し、常に大切にしておかないと、保育士の当たり外れは子どもの人生をあまりにも左右してしまう。

ただ預かっていればいいんだ、といわんばかりの政府の子ども・子育て支援新制度が、この国の将来に及ぼす影響は計り知れなく大きい。

### 「風景」の中にいること

先日、2歳の子どもに何か一生懸命説明している母親を見ました。「2歳の子どもに説明する」、こんな素晴らしい瞬間があるんだ、と思いました。

真剣で、なにかとても広い、宇宙のようなものを説明している感じがしたのです。こういう時間を自分はもう一度持てるのだろうかと考え、思わず、遠くを眺めました。

幼児といると、自分が「風景」の中にいることが感じられて、自分の「立場」がよくわかります。その絶対的「立場」に安心して、暮らせばいいのだと思います。

### 園長先生からのメール

梅雨の晴れ間の日差しがまばゆく、今日は子ども達が久しぶりのプール遊びに歓声を上げて楽しんでます。松居先生、お変わりございませんか？

うれしいニュースが2つあります。

まず一つ 先日、保護者の一日保育者体験のマニュアルを検索した後、高知県の教育委員会に連絡をさせてもらい、いろいろお伺いできました。もしかしたら見学をさせて頂く事になるかもしれません。

もう一つは私たちの保育園でも一日保育者体験を実施しようと考えているのですが、いきなりは難しいので、まず参観日をクラス単位で行い、朝、9時半から保育に参加してもらい、給食と一緒に食べ、お昼寝をさせてもらってから、別のお部屋で子ども達が寝ている間にクラス懇談会后、フリートークで保護者同士で話してもらい3時におやつを食べて降園。という日程で参観日を行いました。スタートは1歳児クラスからでしたが、参加率は100%で感想の中に「長い時間なのでどうかと思っていました、あつという間に時間がたちました。」「楽しかったです。」「日頃の保育園での様子が見えてよかったです。」「午後の時間に保護者の方と仲良くなれました。」とありました。来年度の一日保育者体験に一步近づけたようで嬉しくなりメールしました。

梅雨明けにはもうしばらくかかりそうですが、夏風邪等お召しになりませんようご自愛ください。

### 保育に、お日様は大切です

こんな、新聞記事がありました。

「1歳児まで育休を 地下で保育所可能に 区長会、緊急要望」：

『東京23区の区長でつくる特別区長会は19日、待機児童対策について厚生労働省など関連省庁に緊急要望書を提出したと発表した。1歳児までの育児休業を原則義務化するような制度改正と、地下でも保育所を開設できるような規制緩和を求めた。』

「1歳児までの育児休業を原則義務化」。いい動きだと思いますが、1歳までではなく、真剣にやるなら「3歳まで」でしょう。この頃の幼児は、毎年違った役割を持っている。0歳児と3歳児では、親を育てる育て方がずいぶん違う。

1歳まででは、保育士不足と財源不足に困った末の緊急「対策」にしか思えない。区長さんたち、目を覚ましてください。子どもたちの気持ちを優先したら、育休は3歳まで。それまでは、親子一緒に、（園に作られた？）子育て支援センターに通ってくるのがいいかもしれない。そこで過ごす日々、そこで生まれる絆、往復の道のりが親子の一生を支えるのだと思います。

労働施策に思考の根っこがあるから、「地下で保育所可能に」などという要望につながる。

子どもたちにも、保育士さんたちにも「お日様」が必要です。たとえ雨が降ってお日様が雲に隠れている日でも、窓を通して、雨降る園庭を眺められることが、保育士にとってどんなに大切だったか。園児と一緒に、「雨上がったら外で遊ぼうね」と、黙って心を合わせることが保育で、保育士たちの心を育て、人生を満たしたのです。

## 「受け皿」

「保育の受け皿」という言葉を耳にするのです。  
こういう新聞記事がありました。

『安倍晋三首相は6日、東京都内で講演し、保育所などに入れない待機児童の解消に向け、「50万人分の保育の受け皿を整備したい」と述べた。政府はこれまで、2017年度末までに40万人分の受け皿確保を目標としていたが、上積みをめざす。』

『首相は、政権が掲げる「1億総活躍社会」の目標「希望出生率1・8」について、「20年代半ばまでには実現せねばならない」と強調。その具体策として、保育の受け皿確保のほか、新婚夫婦や子育て世帯が公的賃貸住宅に優先的に入居できるようにしたり、家賃負担を軽くしたりする考えを示した。』

本来なら「子育ての受け皿」というべきでしょう。でも、そう言ってしまうと、そこに危うい闇が見えてしまうから、みんな言わない。

その人の人生のあり方を決定づける「親子の関係」は、双方向へ重なる日々の体験の中で育ち、築かれてゆくものです。子育てを、親子という特別な関係が形造られる営みと考えた時に、「受け皿」という言葉自体がすでにおかしい。非人間的、非現実的なのです。それに、もう誰も気付かなくなりました。マスコミや教育を通しての情報の共有が、不自然を、すっかり当たり前に見せている……。

本当は、子育てに受け皿などありえない。一歳の時の一年は、その親子にとって一生に一度の、二度と体験できない特別な、特殊な一年で、それはゆっくり流れるように見えて、あっという間に過ぎてしまう。人間社会の絆の土台となるその数年の体験を犠牲に、国が経済のために、「希望出生率」を目標に、一日11時間親子を切り離すのであれば、できるかぎりその時間を価値あるものにしなければいけない。「受け皿」を用意する人たちには、その質に関して相当の責任がある。

（「新婚夫婦の家賃負担を軽くし」結婚しやすい環境をつくるという政府。子どもを産んでほしいから。

こんな記事もありました。

配偶者控除見直し検討・自民税調会長が表明：「伝統的な家族観や社会構造の変化にあわせ、女性の社会進出を阻む壁をなくしつつ、結婚を税制面で後押しする狙い」

社会進出を阻む壁は「子ども」とハッキリ言わずに、結婚して子ども（壁）を産めと言う。これがたくらみでないのなら、支離滅裂です。その根っこにある矛盾をごまかすために、「受



け皿」という言葉が使われている。こういう言葉に慣れてはいけない。麻痺してはいけない。簡単に受け入れてはいけない。

ある保育園の園長先生が首を傾げていました。受け皿で育った子どもが、受け皿で育てることに躊躇しなくなったら、もちろんその逆の場合もありますが、全体的にそれが当たり前になっていったら、保育界は本当に受けきれぬのか、誰が子どもの成長に責任を持つのか、社会としてそれでいいのか心配です、と。)

## 幼児を囲む静寂・風景

音楽もする私が、自分の子どもを幼児期に毎日十時間、預けざるを得なくなったら、どうしても欲しいものは何だろう、と考えてみました。

強く思ったのが「静寂」です。昔から幼児期の子どもを囲んでいた静寂が、近ごろ仕組みの規制緩和によって忘れられている気がしてならないのです。

背後に静寂がなければ、言葉さえも騒音になっていく。風景さえ、見えなくなってゆく。

「新しい園舎と広い園庭が完成したら噛みつきがなくなった」と言っていた園長先生の言葉を思い出します。ゆとりのある空間と景色に、保育士たちが落ち着き、無愛想だった親たちが自然に朝、挨拶するようになったというのです。不思議です。風景から挨拶が生まれます。

風景が生み出す「心のゆとり」が集団としての人間を支えていたのです。言葉でも理屈でもない。幼児の居る風景が整ってゆくと、幼児の居る風景が人間社会を整えてゆく。その風景が人間たちの安心を支えるのだと思います。「花束を贈ろう」と思う人になるのだと思います。

窓から雨をながめ、一緒にしゃがんで花をながめ、カタツムリをながめ、倒されてしまった積み木をながめ、ある日静けさの中で、無言で心を重ねてくれる人が身近にいるかどうか、で幼児期の体験はその価値が決まってくるのです。いい保育士は、それを生まれながらに理解しています。その静かな心の重なり合いが少ないと、幸福感が誰かとの相対的なものであって、自分の想像力の中にあることがわからなくなってくる。すると必然的に、数年後に始まる学校生活での人間関係の質が粗くなってくる。

いじめの質が粗くなってくる。その風景が重なり、学校を卒業し競争社会に入って行った時の体験が、年々、殺伐としたものになってきている。それが、最近わかります。信頼関係の希薄さにアップアップして、職場での人間関係が辛くなり、みんなでもがいている感じがするのです。競争社会は、誰かと競争するだけではなく、一緒に闘う（働く）人間との信頼関係に安心する、ということでもありました。心の重なり合いが薄ければ、闘ったとしても、勝ったとしても、それは虚しい体験でしかない。体験を、お金で計ろうとしても、虚しさは必ず残ってしまうのです。

損得勘定とは離れた、「忠誠心」みたいなもの、約束ごと、決まり事に人生は支えられている。

私が一人で公園に座っていたら変なおじさん。でも、2歳児と座っていたら「いいおじさん」。

そんな宇宙の法則、遺伝子の働きみたいな約束ごとを感じると、そこに居る幼児たちに、すでに存在する法則のようなものが見えて、もっと楽に生きられると思うのです。こういう流れの中に居ることに感謝すると、流れ全体にいい感じの責任を感じる。こういう種類の責任というものは、良いものだな、と理解する。

ツイッター (@kazu\_matsui) は不思議な次元で会話が成立します

『土曜日に、親たちはスキーを車に積んで出かける。「お兄ちゃん、お父さん、お母さんはお休みなんだけど、僕は保育園があるの」と園児が言う。そんな話を岩手で保育士から聞きました。土曜日でも就労証明なしでも預かれという施策が広がっています。』とツイッターに私が書きました。

『子どもは夏休みがないんだってさ。私たち保育士は交代で休みを取れるけれど、一日も夏休みがない保育園だから（休んじゃダメだから）子どもは休みなし。「夏休める日」の希望保育日などの手紙もダメで「お子さんと一緒に休める日はありますか？」と聞くのもダメ。親が休みでも全部来る子どもが殆ど。』

という呟きが返ってくる。

自分の子どもの気持ちを考えない親は、自分の子どもを育てている保育士たちの気持ちも考えない。仕組みだから、仕事だから、私たちの権利だから、税金払ってるんだから、で「保育士と子どもの日常」について考えるのをやめてしまった親が数年の間に急に増えている。だから、0歳児を預けることに躊躇しない親が増えている。これに加えて、保育士たちが子どもの気持ちを考えなくなったら、考えたことを親たちに言わなくなったら、この国をこれまで支えてきた「保育」が終わってしまう。

10数年前、地方でお盆に「希望保育」で保育士が数日休みをとれた時代がありました。「保育士だって墓参りはするんだ」という園長の一言で、親たちが納得した。そんな日本がありました。一緒に育てている、という信頼関係が保育園という場所で育っていたからです。そうした人間同士の育ちあいや、気遣いが、「保育は成長産業」「11時間保育が標準」とした閣議決定や施策でこの国から消えてゆく。そのスピードが、いま速すぎます。

別の保育士さんから、

『お姉ちゃんたちだけ USJ 連れてって、一番下は保育園って子いたよ。ほんとに、馬鹿だよ。子どもをなんだと思ってるの？土曜保育安易に使うなや』という怒りの叫び。

土曜保育、長時間保育、病児保育、預かり保育、ひととき保育、障害児デイ、子どものショートステイ、学童保育、「安易に使うなや！」というのが保育士たちの本音だと思う。福祉に関わる人たちすべての本音かもしれない。「安易に」という言葉の陰に、子どもたちと保育士の「無理を承知の」時間があることに、もう誰も気を留めなくなっている。

そして、

『台風の日に大雨の中赤ちゃんを連れてくる育休中のお母さんもいる、と公立園の園長が切ない顔をしてました。育休とっても、保育園をやめたら育休明けに行き場がなくなるとかで。何のための育休？』とツイートがくる。

育児をするための育休ではなく、育児から逃れるための育休。待機児童がいる地域では起こりにくいですが、もともとニーズではなく、自分の希望、便利だから、またはなんとなく、で保育園に預ける親が相当数いたのです。

政府は、潜在的待機児童の向こうに潜在的労働力を見ているようですが、それは保育の実情を知らない素人たちの希望的観測でしかない。親たちの意識の変化により保育界が追い詰められ、保育の質の低下により学校が追い詰められ、しかも税収が増えなかった時、しまったと思うのでしょう。その時、すでに福祉は成り立たなくなっている。そして政治家たちの任期も終わっている。三人目は保育料無料という施策もそうですが、現場が「おかしいな」と思われる施策は、だいたい親たちの子育てに関する意識を、保育が成り立たなくなる方向へ持ってゆく。

土曜日は保育園に子どもを預け、親が休む日。リフレッシュして日曜日に子どもとしっかり遊びますという親さえいました。政府が作った仕組みを利用し、何がベストか計画を立て、利用できるものは利用する。合理的といえそうなのですが、これでは幼児と一緒にいる時間が「重荷」「負担」という認識に近づいていく。この方向へ進んで、はたして学校教育が成り立つのか、疑問です。

一方で、こんな切羽詰まった眩きが届きます。

『乳児クラスでは、其々が休憩時間など取っていたら何も出来ません。個別のお便りを書く、0歳児が多い中（勿論、午睡リズムもそれぞれです）就寝中は呼吸確認、寝返り出来る子をうつ伏せから仰向けにさせる等（そして動かすから泣いてしまう）何人保育士がいても休憩なし』

『SIDSも不安で、皆、乳児クラスを離れて休憩などできません。何か事故があると「保育士何してた？」と批判されている。でも、皆いっぱいいっぱい。「休憩とってました！保育士一人で見てました」って言ったら？暗に保育士は（特に乳児）休憩なんかないぞ！とされている』

市場原理に巻き込まれた保育界が限界に来ています。

## メールをいただきました

松居和様

いつも「シャクティ日記」（私のブログ）を拝読し、参考にさせていただいております、大阪市在住のK.I.と申します。

今年に入ってから、なんとなく手に取った「愛着障害」についての本をいくつか読み、ネット上でも「愛着障害」について色々検索していく内に「シャクティ日記」と出会いました。

私は子どもを0歳児から保育園に預けて働いていましたが、愛着障害についての本や「シャクティ日記」に出会ったことをきっかけに、先月末で退職して現在2歳4ヶ月の子どもと、家で過ごしています。保育園では概ね楽しく過ごせていたようで、大好きな先生方やお友達を作ることができました。私と二人だけで過ごしては経験できなかったことも沢山ありました。

保育園に通わせているお母さん方の中に、「子どもと家でずっといるのは私には無理」だとおっしゃる方が沢山いて、経済的な理由で預けていらっしゃる方の方が少ないのではないかと思います（厳密に言うとうちもそうです）。

また、専門職で、子どもを産む前からその分野で社会貢献することに強いこだわりのあった先輩もいて、現在二人目を出産したばかりですが、子育てだけに「縛られる」ことは良くないと考えていらっしゃるようです。

私自身、仕事を辞めるにあたって相当悩みましたが、結局何が正解なのか見えてこず、人によって外で働くことでバランスが取れているのであれば、それはそれで間違った選択肢ではないように感じています。

でも、あくまでもこれは身近な現実のみを見て感じていることなので、このままでは将来、松居先生が危惧されているような事態が起こってくるのでしょうか？

末筆ながらますますのご活躍をお祈り申し上げます。 K.I.

（返信）

お手紙ありがとうございます。とてもよくわかります。

保育園で0歳から育ったから、必ず子どもがこうなる、ああなるということではないのです。たぶんもっと不自然な環境で、例えば貧困とか、戦争とか、不慮の事故とか、思いもよらない環境で立派に育つ子どもはいくらでもいました。でも、それは社会にそうした状況を補いあう人間関係があれば、ということだった気がします。

いま先進国社会で起こっている状況、特に親心の希薄化が原因になって起こる保育の質の低下はブログに繰り返し書いている通りで、そういう保育士の当たり外れが激しくなっている状況を知れば、三歳未満児は預けない親たちは相当数いると思うのです。社会全体の変化のことを言えば、カナダで行われた調査などを見ると、やはり保育施設の普及による愛着関係の不足は、社会全体が荒れてゆく大きな原因になっているのだと思います。（「全員保育プログラム

と、子どもの認知以外のスキルの発達」[http://itsumikakefuda.com/child\\_Quebec.html](http://itsumikakefuda.com/child_Quebec.html))

私の視点は、どちらかと言うと、子育てを、子どもがどう育つかということより、親たちの体験と捉えて、子育てとキャリアの両立ということはある程度、その体験をするか、しないか、であって、出来ることなら乳幼児とのこの体験だけはなるべく多くの人たちがした方がいいのではないかと。そういう空気が感じられる社会であってほしい、ということなのです。

確かに、子どもと長時間二人きりで一緒にいるのは、不自然ですし、それが無理と思っても普通だと思います。3、4人の大人たちが見守る、それが人類の歴史だった。子育て支援センターを中心に、親子を引き離さない施策をやっていけばいいのだと思います。そういう方法で、幼児たちの願いを優先して未満児保育を行って行けば、保育はまだ成り立つ可能性を持っていると思います。

このままでは、家庭も保育も学校も、共倒れのようになってゆく。それだけはなんとか防がないと、という気持ちでやっています。

### 希薄化する信頼関係

新制度によって、親と保育者の信頼が急に希薄になっています。

親への利便性と雇用施策で制度を作れば、幼児を育てている保育者たちの反発を招くのは当たり前。「サービス」を求める親たちの現場への風当たりは以前にも増して強くなっています。挨拶しない、入園のための見学にも行かない。注意をすればプライバシーの侵害と気色ばむ、慣らし保育にさえ文句を言う親が地方でも増えている。サービス産業に苦情を言うように連絡帳に担当の保育士に対する暴言を書く親たちさえ現れている。残念ながら、これでは保育士は辞めてゆく。いまは、いい保育士が去ることが、「痛みをとまなう」社会全体の自浄作用なのかもしれないとさえ思います。

「保育園落ちた、日本死ね」ブログをきっかけに、突然、そうさそうさ、という議論が国会で始まりました。社民党の福島瑞穂さんが「子供たちが保育を受ける権利」などと言っていましたが、日本も批准している国連人権委員会の「子どもの権利条約」に、子どもは「できる限りその父母を知りかつその父母によって養育される権利を有する」とあるのです。誰もこの権利を子どもたちのために言わない。人類の歴史と「人間性」の成り立ちを考えれば、経済論よりこちらの方が優先されるべきなのです。「保育園落ちた」のは子どもで、「死ね」と言っているのは大人、そこに二つの命と人生があることに誰も気づかない。子どもは、「保育園落ちた、よかった」と遺伝子の領域で叫んでるかもしれない。

今回の急激な保育士不足を生み出した施策は、民主党政権時代に「新システム」と呼ばれた制度から始まり、それが三党合意で自民党に受け継がれたもの。だから民進党も、他の野党も歯切れが悪い。「待機児童なくせ」の向こう側に「保育士がいらない」という現実があるのに、あまり言わない。この保育士不足は、三人目を生めば保育料無料、就労証明無しでも土曜日も預かれ、幼稚園も三歳未満児を預かれ、2時間働けば11時間預かる、11時間保育を「標準」とする、といった政治家の無責任な人気取り政策と、保育で儲けようと企んだ人たちによって創られたのです。

本当に働いている人の勤務時間プラス通勤時間だけ預かっているのなら、病児・病後児をやったとしても保育士は充分過ぎるほど足りています。それを保育士たちが知っていることが待機児童問題の根底にある。

ただ待機児童をなくせ、と言うのではなく、幼児期の子育てに関わる問題は、国の存続、あり方に関わる緊急かつ最重要問題だと理解する政治家が現れてほしい。

この時期の子どもたちの体験が将来にわたってこの国の教育、福祉、保安に影響を及ぼしているという強い意識を持ってほしい。そうすれば、待機児童問題は自然に解決する。本当に預けなければならない人たちは、預けられるようになる。

## 「在宅育児世帯」を対象に、現金給付

同様の制度を始める市の行政の方からの知らせです。

『今日のニュースで鳥取県が県レベルで家庭保育への給付金を創設するというニュースがありました。』

<http://www.sankei.com/west/news/170118/wst1701180086-n1.html...>

「鳥取県は18日、0歳児を保育所などに預けていない「在宅育児世帯」を対象に、現金給付を含めた支援制度を平成29年度から開始する意向を各市町村に示した。県によると、1億～2億円を予算案に計上する。都道府県レベルでこうした制度を導入するのは初めて。

県が作成した制度案では、事業主体は市町村とし、児童1人当たり月に3万円程度の給付を想定。県は1万5千円を上限に助成する。現金給付の他に一時預かりサービスの利用補助や子育て用品などの現物給付も選択可能とし、所得制限を導入するかどうかも含めて各市町村に判断を委ねる。

子育ての経済的負担から出産をためらうケースを減らす狙いもある。各市町村長らが出席した行政懇談会で、平井伸治知事は「子育て支援に厚みを出し、ぜひ多くの子育て世帯を応援したい」と理解を求めた。

市町村長らからは「家庭での子育てを促す」「保育士不足対策としても効果がある」など肯定的な意見が多数を占めた。」

この動きが広がることを期待します。保育士不足と保育の質の低下に対応するには、「子育てを親に返してゆく」方向しかない。

全国的に見て月に5万円の直接給付でも、いま3歳未満児に使っている税の総額より安いはず。鳥取県の支援制度は、保育士がいないことと、未満児保育を増やせば自治体も恒久財源が必要になることへの対応策かもしれませんが、幼児の願いには沿っている。弱者の願いを優先すると学校も含めていい循環になる。

園児減少を心配する私立保育園や幼稚園には、子育て支援センターとしての機能を持つてもらえばいい。親子が共に過ごせるように、親たちが子育てをする上で孤立しないように、虐待などが起こらないように、交流を深める機会を作り、そこにしっかりと補助を出せばいいのです。子どもの奪い合いで保育園と幼稚園を競わせるようないまの施策は、保育のサービス産業化を招くだけで、決して子どものためにはならない。

(福祉に商売や損得勘定が入ってくると、仕組みから人間性が欠けてくるのです。先日、認定子ども園に移って2年目の幼稚園で主任さんが、もう無理です、何でこんなことをしたのですか、と園長に言って去って行く姿に出会いました。園長先生は補助金と人件費で園の経営ができると思っていたらしいのです。しかし実は、主任さんの心で園がまとまっていた。辞められて突然それに気づく。それでは遅いのです。子育ても「保育」の本質も、心の「まとまり」が一番大切なのです。)

母子手帳や検診の延長線上に乳幼児の母親たちが集まる場所を、例えば年配保育者が居る幼稚園や保育園に併設して作る。そうしている園もあって、小さなキッチンもあったりして、自主的な簡易料理教室が開かれたり、ママ友会が毎日開かれたりしています。森の中や、景色のいい所がいいです。

鳥取の情報をツイートすると、「一時保育や家庭保育の親向けの支援事業など、園児がいなくても地域が園に求めている必要な子育て支援事業はたくさんあると思います。家庭で保育したいけど経済的にできない家庭が待機児童って、子育て支援の方向として本末転倒のような気がしました」というツイートが返ってきました。

(最近のブログから)  
子どもたちからの警告

子供たちがなりたい職業ランキング(ソニー損保生命)  
保育園の先生は上位から消えました。  
2015年は第3位。2017年は第11位。

子どもたちからの警告です。安易に「預けて、働け」と言う政治家たち、その動きを扇動するマスコミに対する警告です。

保育士たちが最近活き活きとしていないのかもしれない。保育が「子育て」であること、幼児にとっては対一であることを忘れ、「仕事」になってきているのかもしれない。0、1歳児を躊躇せずに預ける親が増えたからかもしれない。保育の現場から、幼児たちが本能的に感じていた魅力が、数年間の間に突然、欠け始めている。

このリサーチは、将来、本当に保育資格をとってほしい、心ある子どもたち、資質のある生徒たちが保育者養成校に来なくなることを意味しています。

もうすでに、そういう状況に入っているのかもしれない。

以前、保育士が子どもたちの「夢」だった頃、なりたい職業のトップ3だった頃、子どもたちは、賃金とか労働条件とか、そんなことでこの仕事に魅かれていたのではなかったはず。もっともっと大切に人間的な雰囲気、そして自分がいい人になれる時間に子どもたちは憧れていたのだと思うのです。そのことに政治家たちは気づき、肝に銘じてほしい。このメッセージは、このままでは、この国の根幹が壊れてゆくことに対する、子どもたちからの警告だということ。

子育てを、一生に数度しかできない素晴らしい体験と位置付けないから、その貴重な意味を、理屈ではなく「常識」として伝承しないから、巡り巡ってこういうことになる。男たちが結婚しなくなっているのと似ています。みんな、自分の持っているいい人間性に感動する体験をしようとしな。それどころか、自分自身を体験することから、逃げ始めているのです。

三年前、新制度が始まる前年に、宇都宮の保育施設で乳幼児が亡くなる事件(事故)がありました。当時、ブログに書きました。<http://www.luci.jp/diary2/?p=255> こういう事件が、保育制度を規制緩和し労働力を確保しようという政府の保育施策の警告になっていない。「待機児童をなくせ」という掛け声のもと、むしろ増える方向に進んでいる。

この国の家庭崩壊と保育の質の低下を招く保育施策が、欧米のように訴訟社会になることでしか止まらないのか、と思うと情けなくなります。

「園長先生と刺しゅう」

(二十年前、こんな人に会い、こんな文章を書きました。)

先日(注:20年前)、横浜南区のあゆみ幼稚園で講演しました。

講演の一週間前に、30年間の園の歴史をまとめた一冊の本が送られてきました。「育ちあい」という本でした。感動しました。

母親たちに毎年、園長先生が子どもが描いた絵を一枚選んで、その絵を元に、刺しゅう絵を作らせているのです。布を一枚渡し、子どもの絵を丁寧にトレースし、布の上に写しとり、そっくりそのままに刺しゅう絵に刺してゆくのです。

園長先生は言います。

「子どもがどこからパスをスタートさせたかを読みとり、パスの動きを追いながら一針一針進めます。そして約一ヶ月をかけて完成し、原画と共に園に提示して家族そろって鑑賞しあいます。もちろん祖父母のみなさんも大勢・・・」

子どもたちが10分ほどで描いた絵でしょう。普通だったら幼稚園から持って帰ってきた絵をちょっと眺めて、ああ上手だね、と誉めてやって終わってしまったことでしょう。その絵を母親が何日もかけて同じ大きさの刺しゅうに仕上げてゆくのです。

本には、子どもの絵と母親の刺しゅうが上下に並べられたカラーのページがあって、それは見事でした。筆先のかすれているところまでちゃんと糸で表現してあるのです。

そして、その絵の下に、母親たちの感想が載っていました。私はそれを読んで、園長先生の達人ぶりに驚かされました。

「『やった！やった！ ああよくやった』13日午前1時30分、一人で声をだしてしまいました。この4～5日、深夜に集中できました。子どものために、こんなに一生懸命になれることって何回あるでしょうか。さあ、今夜はゆっくり・・・」

「鳥の後ろ足の部分は主人が刺してくれました。刺し終えた時は、主人と二人で思わず『できたね』と声をかけあいました。いい思い出になると思います。」

「どんな巨匠が描いた絵より『ステキ、ステキ』と自画自賛しています。刺しながらどんどん絵の世界に引き込まれていきました。試行錯誤しながら作る過程は、まるでキャンバスに絵の具をおいていく楽しさでした。」

「できました！ 3枚目です。もう最高です。産みの苦しみも赤ちゃんの顔を見たとき忘れてしまう、今、そんな気持ちです。息子は左利き、私は右利き、同じような線にならず何回もほどきました。もうこの子のために、こんなに長い時間針を持つことはないだろう・・・、そう思いながら刺しました。今、一つのことをやり終えた充実感と三人分無事終えた安堵感でとても幸せです。」

「『お母さん、まだ、こんなところなの？ ボクなんて、サッサと描いたんだよ』と息子が横目でチラリ。私だってどんなにサッサとやりたいか・・・。眠い目で遅くまで刺し、目を閉じると絵の線が、はっきり浮かんで夢にまででてくるのです。やっと終わった！という喜びと、もうこれで最後なのだという寂しさと・・・。この素晴らしい刺しゅうを持っている子どもたちは幸せだと思います。」

「途中でめげそうになった時、主人が少し手伝ってくれ、その姿を見て子どもも目茶苦茶ではありますが『手伝っておいたよー』と。よい思い出と、よい記念ができました。」

「この一ヶ月睡眠時間を削り、家族には家事の手抜きに目をつぶってもらい本当に大変でした。でも苦勞した分だけ満足感も大きく主人から『ご苦勞さま！』と声をかけられ、こどもからの『ママとても上手だよ。そっくり！』のひとことでやってよかったと思いました。」

「先輩のお母さまが相談にのってくださり、前年度の作品を参考にと貸していただきました。『私だって初めの時は、同じように先輩にいただいたから』のことばに胸が熱くなる思いでした。くじけそうになった時に応援してくれた主人と子どもたちにも感謝の気持ちでいっぱいです。」

「一針一針刺していると小さな針先から子どもの気持ちが伝わってくるのです。こんな素敵な、あたたかい気持ちとの出会いができた刺しゅうに感謝します。」

「でき上がりました。目の疲労を感じながらも心は軽やかです。刺しゅうをしていくうちに、だんだんこの絵が好きになっていくのです。とても不思議なことでした。いとおしいとまで思うようになりました。」

「すてきな絵を描いてくれた娘に・・・。家事を協力してくれた主人に・・・。アドバイスや励ましをくれた友達に・・・。何よりこの機会を与えてくれたあゆみ幼稚園に心から感謝を込めて。」

すべての鍵がここにあります。人間社会を家庭崩壊の流れから救うすべての鍵があるので。学者の教育論や社会論、子育て論や福祉論、保育論を吹き飛ばすすべてがあります。

幼稚園版「幸せ家族計画」とでも言いましょうか。でもこの場合には賞品はありません。母親たちを動かすのは園長先生の人柄でしょう。（祖母のような方です。）

園長先生にたずねました。「強制的に全員にやらせるのは大変でしょう」

すると園長先生は「いえいえ、強制じゃないんですよ。やりたい人だけなんです。でも100%志願なんです。それが嬉しいですよ」

私はハッとしました。そうなんだ。まだ日本の母親たちはすごいんだ。こんな園長先生の心を生き続けさせているのは、それにしっかり応えている母親たちなんだ。

「もう30年もやっているんですが、最近になって母親たちの間に、刺しゅうのやり方を伝えるノートが代々受け継がれていることを知ったんです。先輩の母親から、本当に詳しく、少しずつ書き加えていったんでしょうか。このクレパスの赤い色を出すには、何々社製の何番の糸がいいとか、かすれている部分をうまく表現するテクニックとか色々あって、そのノートが伝承されていくんです。子育てもやっぱり伝承ですから、先輩から次の世代のお母さんへ、受け継がれてゆく大切なもの、気持ち、がその中にあるような気がして嬉しかったんです」

わが子の絵を刺しゅう絵にする。

この一見意味のないように思える妻の無償の努力を傍らで見つめる夫。自分の描いた絵が時間をかけて少しずつなにかとても立派なものになってゆくのを、わくわくしながら見つめる子ども。一枚の刺しゅうを囲んだ家族の心の動き。

自分の手で再現されてゆくわが子の絵を見つめ、針を運びつづける母親の心。針の先に見える絆・・・。

将来この一枚の布を見るたびに、母親の心に一ヶ月の凝縮された過去の時間がよみがえるのでしょう。

こんな課題を母親に与えてくれる園長先生がいた。

これは理論ではないな、と思いました。

子育ての「負担」を軽くしようと、延長保育やエンゼルプランを園に押し付けてくる文部省や厚生省の役人には、こういう大自然の摂理は理解できない。

発想が全然違う。

幸福感の次元が違う。

宇宙に対する見方が違う。

魂に対する理解度が違う。

園長先生が、幼児を見つめながらこれほどまでに心眼を磨いて真理を見ている。

親たちに「親」というひとつの形を舞わせている。その様式美に夫と子どもがちゃんと気づく。

「かたち」から入る日本の文化の真髄がここにあるのでしょうか。理屈ではなく、かたちなのです。

人生は出会いだと言います。こういう人に出会える親たちの幸運。子どもたちの幸運。私の幸運。

さっそく次の日、鹿児島でこの話を園長先生たちにしました。

「すごい！」

「鳥肌がたつわ」

「私も頑張らなきゃ！」